



「染め木」を組み込んだ自然学校

10月22日の本校開校20周年記念シンポジウムでの明石市立清水小学校の河合先生による実践発表内容を、インタビュー形式でまとめてみました。前任校の明石市立魚住小学校での実践が、中心となっています。



Q：自然学校のねらいは？子どもたちに、どのような活動をさせたいのか？

A：魚住小学校の自然学校は、この南但馬自然学校を拠点として2003年から行っています。南但馬自然学校の自然を見渡した時、人の手が行き届いた健全な森、手つかずの自然が残る森、あるいは、スギ、ヒノキなど、針葉樹林が主体の森と様々な広葉樹が混在している豊かな森と出会うことができました。この豊かな森、しかしながら必ずしも健康とは言い切れない状態の森に出会った時に、自然学校の活動プログラムは、命のつながりから里山体験プログラムを主軸におきたい、主軸において構成したいと考えました。これは、ただ自然をフィールドにした遊びに終始しないで、自然との共存、共生を考えた、考えさせたいというプログラムを組み立てたいと考えた結果です。

Q：間伐をする意義は？

A：里山という場所では、森は人の手で間伐という作業をしなければ健康な状態で育たない。子どもたちに自然学校の事前学習で、間伐の必要性を学習しました。木は人間のように自由に動くことはできませんから、余りにも過密しすぎた森では、隣の木々と日光や養分を取り合いをする。つまり、ケンカをしている状態となるわけです。この状態を続けていきますと、やがて木は自然淘汰によってケンカに負けた木は枯れてしまう運命にあるわけです。この状態を長く放置すると、早く日光を手に入れようと隣の木々よりも上へ上へと伸びようとする。競争が激化し、しっかりと根をはることができないあまりに、「背ばかりが大きくなる、災害に弱い森、軟弱な森になってしまいます。さらに、この競争はやがて低木種な木々が生き残ることを許さず、高木種、スギ、ヒノキばかりの森になってしまう。多種多様な森でなければ、豊かな森とは言えません」と言うことで、やがて、近いうちに枯れてしまう状態の木は、人の手によって生き延びること、それは過度な競争を緩和させ、健康な森に近づけることになるというようなことを勉強します。さらに、自然を大切にするというがために、何も手をかけなければ、それは単にその森を見捨ててしまうことにすぎないわけで、自ら、子どもたちが森に入って間伐することは、自然の共生に寄与する大切な活動と考えています。

Q：染め木をしようとしたのは？

A：間伐した木は通常そのまま森の中で放置され、やがて朽ち果てるのを待つばかりです。それは、生育状態の良くない木が間伐されるわけで、そのまま、その木を何かに活用する価値がなかなか見い出せないからです。森の中で放置された長い年月が経ち、微生物たちに分解されますが、やがては栄養豊かな土へと変わっていくのですが、それは決して無駄なことではないと思います。しかしながら、間伐される木は大切な命を絶ち切られ、そのまま放置されるとなれば、それはやっぱり捨てられたはかない命と言えるのではないのでしょうか。子どもたちには、このはかない命であっても、大切な命であることに注目させて、そのはかない命の間伐材にも新しい命を吹き込む活動として、染め木を考えたいわけでは

Q：染め木の仕組みは？

A：染め木というのは、文字通り木を染めるということではありますが、ペンキなどで木材の表層を着色するのとは意味が違います。染めることによって、木の年輪や節というものの美しさを隠すのではなく、よりきわだてて見せることができるということが特徴の一つと言えると思います。それを染めていくということは、木が生きていくための活動、つまり光合成を利用することになります。

自然学校では、間伐に始まってその木を子どもたちが運び、バケツの中に作った色水の中に、また新たに立てかけて固定します。そして、青く染まったり、または樹皮をめくってみると赤色の色水を吸い上げれば赤い色になっていきます。

これらは、生命の力強さを体感し、6年生理科で学習する光合成の勉強に結びつくわけです。葉っぱは、太陽の光を集めるソーラーパネルと同じ役割をして、ソーラーパネルで集められた太陽をエネルギーに変えて、バケツの中の水を吸い上げていく、そういう木の持つ命のエネルギーというものを体感することのできる学習と考えています。



Q：その染め木をどのように、活用するの？

A：染め木というのは、だいたい2日から1週間の間でバケツいっぱいの水を吸い上げます。吸い上げられたら、すぐにそれは材料になるわけじゃありません。木材ですから、それらを乾燥させて、その後、色々な素材として活用していくわけになるんですが、自然学校ではあらかじめ、前年度に浸けていた、前年度に仕上げた染め木を学校から持ち込んで、様々な染め木クラフトに挑戦したりしています。トーテムポールとか、染め木を組み合わせた動物たちを作っていたり、5年生の学習であるモビールを染め木で作ってみたいとか、このような形で活動しています。染め木として新しい命を吹き込まれた間伐材は、すべて学校に持ち帰り、図工教材などに役立てています。そうすることによって、捨てるのではなく新たな命を吹き込んだ新たに利用価値をもったものに生まれ変わっていきます。

染め木は、貴重な工作素材として、このような形で加工され、子どもに提供されます。子どもたちは、それらを組み合わせて、自由な発想で、色々な作品を作ってみたり、それを校内の図工展で披露してみたり、または最初に紹介したクスノキを守る活動の中で、クスノキエコフェスティバルを1年のうち1回開くんですが、その中でフェスティバルに参加していただいた保護者や地域の方々へのお礼の品として、ここにあるような染め木を素材とした図工の時間に制作したお礼の品、900から1000個ぐらいの単位で作るんですけど、それらを持ち帰ってもらうということで、図工、魚住っ子たちにとっては、染め木は、とても身近な工作素材として利用することができます。

Q：染め木を通しての子どもたちへの願いは？

A：自然との共生を考えた時に、魚住小学校のシンボルツリーであるクスノキも南但馬の森もたくさん大切なことを語りかけてくれます。我々は、南但馬の森やクスノキを救済する側にいるのではなく、共に木と同じエリアにいる。そういったことを子どもたちに感じ取ってもらいたいと思っています。森を救う、クスノキを助ける、そういうふうに手を差し伸べるだけじゃなくて、実はその中から色々なことを教えてもらっているんだなということを子どもたちに実感してほしいと思っています。それから、染め木という活動を通して、森の大切さ、間伐の必要性、木の美しさや命のエネルギーを体感できればと考えています。机上の学習ではなく、実際に森に入ること、森や木から教えてもらったという体験が、将来の確かな知識やより深い感性につながることを願っています。

編集後記

染め木の活動は、自然学校期間中だけでなく、事前・事後の活動を含んでいます。また、環境教育や命の教育、そして小学校6ケ年を見通した素晴らしい教育です。このような活動が、広まっていくことを期待しています。
(文責 主任指導主事兼指導課長 北條 勝也)